

## 小さな親切

岡山県 郷内中学校 1年 吉浦 龍希

これは、僕が自転車で友だちの家に遊びに行ったときの帰り道のできごとです。

去年の冬、夕方薄暗くなり門限があった僕は、急いで自宅に帰っていました。すると、前方にシルバーカーをゆっくり押して歩いているおばあさんがいました。おばあさんの距離が近づくとつれ、なんだかおばあさんが止まっているように見えました。すれ違うとき、僕は少し横目でおばあさんを見ると、シルバーカーのタイヤが、道路と溝のくぼみというか、穴みたいなどころにはまっているように見えました。

夜だったのでよくわからなかったけれど、ふり返ってもう一度見てみると、おばあさんは少し腰を曲げ、タイヤを上へ持ち上げようとしていました。その姿を見て、気がつく僕と僕は、自転車をこいでいた足を止めていました。

僕は、おばあさんに声をかけてタイヤをいっしょに持ち上げようか迷いました。声をかけても、「自分でするから大丈夫」とか「触らないで」と言われるかもしれない。そう考えると、すぐには体が動きませんでした。しかし、そのおばあさんの横を歩いていく人たちは、誰もおばあさんに見向きもせず通り過ぎて行くのを見て、僕は自転車を端に置き、おばあさんに走ってかけ寄りしました。知らない人に声をかけるのは、とてもドキドキしました。

「大丈夫ですか。」

と言うと、おばあさんは、

「こんなところにはまってしもうて。買い物したのがこんな中に入っとって、重くて上らんのです。」

と言いました。見るとタイヤがくぼみにすっぽりはまっていた。僕が力いっぱいシルバーカーを持ち上げると、はまっていたところからなんとかタイヤがはずれました。おばあさんは、

「ありゃー、ありがとう。今日はな、いつもと違う道を通ってこんなところにはまるやこう、思わなかったわ。ぼく、ありがとうねえ。本当、助かったわあ。ありがとう。」と、少し声を震わせたように言っていました。この「ありがとう、助かった」という言葉を聞いて、僕はなんだか嬉しい気持ちになりました。なぜなら、自分がやさしくされたような感じがしたからです。

ふと腕時計を見ると門限が少し過ぎており、僕はおばあさんと別れ、急いで家へ帰りました。家に着き、この話をお母さんに話すと、お母さんは笑顔で、

「龍くん、知らん人によく声かけられたなあ。」

と言いました。僕は少し照れて、

「あたりまえのこと、しただけじゃが。」

と答えました。お母さんは、

「あたりまえのことがあたりまえのようにできるのは、すごいことじゃが。」

と言いました。僕は、おばあさんに声をかけてよかったと思いました。人に対してやさしく接するという事は、大事なことだと思いました。